2017.7.2 横浜ナザレン教会三位一体節第三主日

「出会いの贈り物」

マルコ９：１４～２９、創世記 11:26～12:4,ヘブライ書 11:1～3

1　信仰告白

今日から、横浜ナザレン教会の礼拝に、信仰告白が加わりました。礼拝の信仰告白とは、私たちが信じている事を公に宣言することです。「使徒信条」は、紀元三世紀から四世紀、ローマで成立した信仰告白と言われています。これからしばらくの日曜日、この使徒信条から、果たして私たちは一体何を信じるているのか・・というテーマで、聖書の御言葉に聴いてまいりましょう。第一回の今日は、信仰とは一体何か？というテーマです。

2　信仰は出会い

最近、ある牧師の説教を読んでいた時、「人は縦軸と横軸で生きている」とあるのを見つけました。なるほどなぁ・・と思います。縦軸というのは神と自分の関係、そして横軸というのは、自分と周りの人間との関係です。人間は神と人との関係で生きていく・・まさにそのとおりです。説教はこう続きます。「普段は横軸―周りの人間との関係の中でだけ生きています。神との関係は忘れているのです。」

この説教を読んでいて、ある証が浮かんできました。捜真女学校の生徒さんの証です。教会の玄関の横の壁にポスターを貼っています。読まれた方もいらっしゃると思います。次のような内容です。「反抗期だったせいか礼拝で語られる愛とか信仰とかいう言葉は偽善のように感じて嫌いだった。転機が訪れたのは高一の時。友人関係にも自分自身にも思い悩む日が続いた。それまでの自分を全否定したくなるような苦しい気持ちだった。自分の中の芯がゆらゆら揺れて定まらない日々だった。その私を救ったのは意外にも聖書の言葉だった。何気なく聞いていた言葉たちが私の考え方を変えてくれたり、助けたりしてくれ

た。私の心に染み渡った。悩みはすぐに消えなかったけれど、自分の芯がゆっくり確立していくのがわかった」というものです。

「自分の芯」つまり縦軸、神と自分とを結びつける聖書の言葉と彼女は出会った。いえ、聖書の言葉を通じて、神が彼女と出会ってくださったのであります。信仰が与えられたのです。信仰とはこの縦軸―神との関係の確立、つまり神との出会いという事ができます。

しかし、私たちに何かよい所があってこの出会いが生まれるわけではありません。一方的な神の恵みです。私たちが全く良い状態の時に信仰が与えられるわけではない事からもそれは明らかです。むしろ、困難や苦しみ、悩み、病気など、自分が望んでいなかった事、自分の力では解決できない問題に遭遇した時に、神と出会う事が多いのです。

何故なら、それは私たちが謙虚になるからです。信仰とは、暗い暗い部屋にカーテン越しに差し込む太陽の光のようです。自分の部屋に電気が煌々とついていたら、窓から差し込む光には気づかないでしょう。困難に打ち砕かれ、へりくだった私たちの暗い魂に差し込む光のように神がたずねてくださり、私たちの内へとわけ行ってくださり、私たちと出会ってくださる・・それが信仰。神との出会いの贈り物なのです。

3　悪霊に取り憑かれた息子の父親

今日の聖書箇所　マルコ福音書９章もそうです。この悪霊につかれた子どもの父親は、最愛の子どもの病を通じて、主イエスと出会いました。この息子はどうやら現代で言う癲癇を患っており、生れてからずっと発作の症状に苦しんできたようです。所かまわず倒れ、泡を噴き、歯ぎしりをして身体をかたくして気を失う。現代のように治療薬もない古代です。何度となく命の危険があったでしょう。息子をずっと見守って来た親の気持ちは想像するにあまりあります。『この子をなんとしても治してやりたい』そう想い続けたに違いありません。おそらく主イエスの所に連れてくるまで、様々な医者や占い師の所に連れていったのではないでしょうか。だけどどうにもなりませんでした。そんな時に「ナザレの人イエスは病気を治す力をもっているらしい」という噂を聴いて父親は藁をもすがる思いで主イエスのもとにやってきたのです。

４　高慢な時代

しかし、イエスさまはいらっしゃいませんでした。この日、イエス様は３人の弟子、ペトロ、ヤコブ、ヨハネを連れて山に登られていたからです。残った弟子たちが息子の病を治そうとしました。が、できませんでした。そこに主イエスが戻ってこられました。この様子を知ったイエスさまは、このように弟子たちをお叱りになりました。「なんと信仰のない時代なのか。いつまで私はあなたがたと共にいられようか。いつまであなた方に我慢しなければならないのか」

この「信仰のない時代」との「時代」というのは「世代」とか「世」という意味があります。信仰のない世代、世界、時代。この言葉から信仰が個々人の問題だけにとどまらない事を示す興味深い言葉です。私たちは信仰をひどく個人的な事と考える傾向があります。私たちの心の内だけの事と考え、外の世界とは区別する。しかし、主イエスはそのようには仰っていないのです。私たちの信仰はこの世とこの時代と決して無関係ではないのです。

さて、その不信仰な時代に生きる弟子たち。ですが、マルコ福音書 6:12 にはこうあります。「十二人は出かけて行って、悔い改めさせるために宣教した。そして、多くの悪霊を追い出し、油を塗って多くの病人を癒した」。つまり、この出来事の少し前、弟子たちは主イエスに悪霊を追い出す権能を授けられて地方へと派遣された時、悪霊を追い出す事ができたのです。しかし、今、彼らはそれができなくなっている。弟子たちの信仰はなくなっている。どうしてでしょうか。

１４節、「律法学者と議論していた」事にヒントがあるようです。悪霊を追い出す力は主イエスから弟子たちに与えられた神の権能です。弟子たちの内から湧いて出るものではありません。しかし、彼らはそれを誤解していたのではないでしょうか。自分たちにその力を所有する資格があると思っていたから、律法学者たちと議論していたのです。もし、弟子たちが主イエスを通して与えられた神の力だと深く自覚していて、癲癇の息子を癒せなかったら、議論はしなかったはずです。神に祈った筈なのです。しかし、弟子たちは神と主イエスにより頼むのではなくて、自分たちの力に頼んだ。弟子たちは自分たちの力で悪霊が追い払える・・と高慢に思ってしまったのです。

しかし、そんな時には、縦軸は見えてきません。神の言葉を聞いたとしても、それを受け入れる事ができないのです。自分たちの力でなんとかしようとする、神を必要としない時代。高慢な時代に弟子たちは生きており、高慢な時代の一部をなしていたのです。

5　父親の不安

主イエスは厳しく弟子たちを叱ります。そして、次のようにおっしゃいます。「わたしのところに連れて来なさい」。そして父親に話しかけられます。「このようになったのはいつごろからか」。主イエスは目の前にいる人と真剣に向き合い、ご自身から声をかけて知ろうとなさいます。神の御子が滅び行く私たち被造物に真剣に向き合い、声をかけてくださる。縦軸の方から話しかけてくださる。自分の方から出会おうとしてくださる。ここで信仰が起こらない筈がない・・と私たちは思いがちです。

　しかし、そうではありませんでした。この父親はこれまでの事を尋ねられた主イエスに、このように答えます。「おできになるなら、わたしどもを憐れんでお助けください」。信仰は生まれていなかったのです。この時点で父親は主イエスと出会っていなかった、それはどうしてなのでしょうか。

　先ほど信仰を妨げるものの一つに『高慢』を上げました。そしてここに、信仰を妨げるもう一つ大きな障害、私たち人間の『不安』が現れています。父親の不安が、主イエスとの出会いを妨げていたのです。父親は不安でした。今までもダメだった、弟子たちもダメだった、この人もダメかもしれない。

　私たち人間はなんだかよく分からない、どうなるか分からない・・という不安に耐える事が難しい存在です。自分たちで事態を把握したい、理解して安心したいと思うからです。だから、本来は神のみ手の中にある事を自分たちの手の中にもってきて安心したいのです。不安が高慢を産み、神から遠ざける、神との出会いを妨げます。

　父親ももう落胆したくはなかったのでしょう。だから、「できれば」という言葉を付け加えた。彼もまた「不信仰な時代」―不安な時代を生きる者だったのです。

6　高慢と不安を打ち砕く主

　しかし、主イエスの次の言葉が、父親の高慢と不安を打ち砕きます。「できれば・・とあなたはいう。信じる者には何でもできる」。この言葉が父親に自分の不信仰に気づかせました。今まで、問題は息子にとりついた悪霊だと考えていました。だから、「何とかしよう、何とかしてもらおう！」としていました。

しかし、「あなたの不信仰が何より問題なのです。神と出会おうとしないあなた自身が問題なのです！」と主は指摘されたのです。今まで父親の目の前に立ちはだかっていた息子の病気という壁が取り去られ、本当の問題が見えてきました。それは自分の不信仰―高慢と不安です。自分の問題がわかったのです。それで父親はすぐに叫んで答えます。「信じます！　信仰のない私をお助け下さい」。この叫びこそ、まさにキリスト者の信仰。これこそキリスト者の信仰告白です。

7　信仰は信頼

しかし、父親が「信じます！」と叫んだ、これはいかにも不思議な事です。何故なら、父親は主イエスが息子を癒されたから、「信じます」と叫んだわけではないからです。ただ主イエスから自分の不安と高慢、不信仰を指摘されたに過ぎません。この父親には主イエスがどのようなお方か、はっきりとはわかっていませんでした。しかし、分かっていないままに主に委ねたのであります。

私たちの信仰もこの点で同じです。十字架と復活の後、聖霊が与えられた時代に生きる私たちは、信仰を通じて、ご自身が父・子・聖霊の神である事を示されます。この使徒信条も、先ず神に対する信仰告白、そして子なる神イエス・キリストに対する信仰告白が続き、最後は霊なる神、聖霊への信仰告白が続きます。ですが、父・子・聖霊の三位一体の神を私たち人間に完全に理解できるか？と言われれば、それは不可能な事です。私たちが完全に理解できるのであれば、それは神ではありません。神は私たちを超えたお方です。私たちが理解しきれない・・それで当たり前なのです。しかし、私たちもまた、この父親と同じく、分からないままに信仰を告白する。なぜなのでしょうか。

この父親は主イエスに話しかけられ、人となられた主イエスを知りました。だから、息子が癒されないままにも「信じます」と叫んだのです。私たちもまた同じなのです。私たちもまた、神がこの世へと送ってくださった御子イエス・キリストの故に、三位一体の神を謎のままに神として受け入れ信仰を告白します。神が御子の十字架と復活によって、ご自身の義なる愛を私たちに決定的に

示してくださった。そして、遥かな時を越え、聖霊なる神を通じて、あなたの罪は既に赦されている、あなたはもう私のものだ・・という事を教えてくださるからです。私たちはこの神の義なる愛により頼むのです。

ですから、信仰は最も深い信頼を意味するのです。信頼とは、人間が他の存在の誠意と愛を信じより頼むことです。私たちが神と出会った時、御子イエス・キリストであらわされた神の義なる愛により頼む事ができるのであります。つまり、私たちはもう自分自身に信頼しようとする必要はなくなります。もう自分自身を義とし、自己弁護し、自分自身を救い、守ろうとする必要はありません。自分自身にこだわり自分を正義だとしようとする人間の奥深い所にある衝動。それは完全に意味を失ったのです。

私はわたしを信じるのではなくて、父・子・聖霊の神を信じるのです。この父・子・聖霊の神への信仰、縦軸を自分の中心に置く事ができるのであります。その宣言が「信じます」という父親の言葉であります。

8　信仰とは抵抗

しかし、この世界は、父・子・聖霊の神に対する信仰とは真反対の事柄に満ちています。「なんと不信仰な時代なのか」という主イエスが嘆かれた時代なのです。事実、私たちがこの世の何かの事に基づいて信じるわけではありません。何かの理由で信じるわけでもありません。この世界の目にみえる事、理解できる事柄はむしろ、信仰する事の無意味さを私たちに訴えているようです。

しかし、私たちはそのようなこの世の事柄に抵抗して、信仰に目覚めます。それが、この父親の「信じます。信仰のない私を助けてください」という叫びに現れています。自分にまとわりつく不信仰。自分の中の不安や高慢、また自分が生きる時代の高慢と不安。ですが、この不信仰に抗って父親は叫ぶのです。言う・・のではありません。叫ぶのです。信仰とは、目にみえるものに抵抗して信じる事なのであります。

何を頼りに抵抗するのでしょうか。それは、主イエス・キリストで示された神の義なる愛を頼りに抵抗するのであります。「この世のどんなものも自分を救

いはしない。ただ主イエス・キリストであらわされた父・子・聖霊の神のみが私を救う」この神の義なる愛のみにすがりつくようにより頼み、これのみにこだわり抜くのであります。

9　自分の外に出る

　ですから父・子・聖霊の神にすがりつき、こだわり抜く、それが私たちの信仰です。「信じます。信仰の薄い私を助けてください」父親がこの言葉を発した時、彼は自分を捨てました。自分の高慢と不安から解き放たれたのです。そして、イエス・キリストの謙遜と平安を頂いたのです。

　私たちもそうです。信仰を告白する時、私たちは自分たちの不安と高慢から出て、キリストの謙遜と平安の内に入るのです。その時に、私たちはまことに自分たちが為すべき事を示されます。

　私はこのような信仰をある牧師から教わりました。私の実家の近くにある日本基督教団宇佐教会の小西美智子牧師です。父親の看病のために実家の大分に戻った時に小西牧師と出会いました。彼女は宇佐教会だけではなくて、お隣の町の豊後高田教会も牧会していました。豊後高田教会は小さな教会です。小西牧師の前任の牧師が引退する時、礼拝出席者が牧師夫妻をいれて三名しかいなかったそうです。前任牧師は教会を閉じようと考えていたようです。しかし、地区の教会で話し合い、豊後高田教会は存続が決まり、小西牧師が宇佐教会と共に兼牧する事となったのです。

　でも、色んな事情で教会の礼拝に集う方は起こされません。会堂もボロボロ。奉仕する信徒さんもいない。「この教会の牧師は自分には無理だ」。そんな不安に小西牧師は苦しんだそうです。そしてひとりぼっちの祈祷会で祈っていた時、使徒信条が頭をよぎった。「我は天地の創り主、全能の父なる神を信ず」冒頭の言葉が小西牧師を捉えました。「そうだ、私が信じているのは、天地の創り主、全知全能のお方だ。このお方が望まれればこの豊後高田教会の礼拝堂を会衆で埋め尽くす事など容易い筈。それができるお方だ。しかし、神がこの会堂を人で埋め尽くそうとされているとしたら、果たしてこの教会の準備はできている

だろうか？壁の塗装ははげ落ちている、カーテンもぼろぼろ。椅子も壊れている。雨漏りもしている。たくさんの人が礼拝できる会堂じゃない。そうだ会堂を修理しよう」。

小西牧師が自分の不安から出てキリストと再び出会った時でした。揺らいでいた縦軸がしっかりと据えられた時でした。翌週から小西牧師はペンキを買い、高いはしごに登って礼拝堂の壁を塗り替え始めました。７０歳の女性の牧師が始めた会堂補修に周りがびっくり。やがて宇佐教会や周囲の教会から会堂補修の献金がささげられ、奉仕する信徒も起こされて豊後高田教会の礼拝堂は整えられていきました。

10 神共にいます

父親が「信じます。信仰のない私を助けてください」と叫んだ時、彼は叫ぶ相手と出会いました。私たちも同じです。「我は三位一体の神を信ず」と告白する言葉、神と出会います。それは、「わたしは孤独ではない」という事にほかなりません。信仰を告白することを通じて、神がこの私たちに歩み寄ってくださる・・と確信させられるからこそ私たちは孤独ではないのです。

私たちには良い日、悪い日があります。誤りを犯しつつ、また正しい事をしつつ、この神と共にあって、喜び、怒り、苦しみ、悲しみ、楽しみ、そして生きるのです。だから、私たちは孤独ではありません。神が私たちと出会ってくださいます。私たちは、いついかなる時にも、結局、神と共にいるのです。それこそ、「我は父・子・聖霊の神を信ず」という事の意味です。

11 新しい生命

癲癇の息子は主イエスによって癒されました。息子に全く新しい生命が与えられました。それは主イエスが手をとって起こされた・・の「起こされた」という単語が主イエスが甦らされた時の「復活する」という単語と全く同じ事からもわかります。

しかし、新しい生命を与えられたのは息子だけではありません。この父親もまた全く新しい生命とされたのです。神との関わりの中に生きる新しい生命です。

私たちも先ほど、使徒信条で信仰告白をしました。私たちもまた新しくされた者。もう自分に頼るのではなく、神に信頼する者、信仰を告白する者です。今日から新しい七日間が始まります。この旅を私たちはいつも信仰告白を唇において歩みましょう。「三位一体の神を信じます。信仰のない私を助けてください」。そう叫びながら。

そして、この神を必要としない高慢と不安の時代と戦いましょう。恐れず人を愛し主に従っていきましょう。そして、また七日の後、この御堂で共に信仰を告白し、父なる神を感謝をもって礼拝しようではありませんか。